

若者よ、

二十一世紀型

スキルを持って



よしむら かずなり
吉村 和就

(グローバルウオーター・ジャパン 代表)
国連テクニカルアドバイザー

秋田県は三年連続、全国学力テスト第一位

全国の小学六年生と中学三年生を対象に行われた全国学力テスト、秋田県は二〇〇七年から二〇〇九年まで、三年連続で一位であった。

同時に文科省は学力と生活習慣の関連について分析している。正答率の高い生徒は「ノートを丁寧に書いている」、「毎日、朝食を取っている」、「学校での出来事を家庭で話す」、「家の人との約束をよく守っている」などであった。

さすが我が故郷の快挙と喜んでいたが、翌年の県内高校生の大学進学率は、パツとしな。筆者は、ことある度に秋田県教育関係者に「小中学校の学力は、親や周囲環境の努

力の結果であり、自分で考えて学習する高校生の実力を上げなければ、教育界の秋田とは言えない」と言い続けてきた。

秋田県学術顧問の委嘱

ある日、故郷の友人から「秋田県が学術顧問を探しているとのこと、お前を推薦しておいたから、話が来たら宜しく」と連絡がきた。しばらくして秋田県教育委員会から「秋田県立高等学校学術顧問」の委嘱状が来た、その目的は「高校生にグローバルな視点でのものの見方や考え方ができる提言や指導」である。ちなみに前任者は、秋田高校および国連での大先輩である明石康氏であった。

秋田県立秋田高等学校での講演

我が母校の秋田高校、来年度が創立百四十周年の伝統のある高校で県内では一番の進学校であり、今年には東京大学に十六名合格している。筆者が在校生だった頃は女子生徒が約四十人くらいだったが、今や女子が全体の約四割を占めている。

「若者よ、二十一世紀型スキルを持って」

七月十八日、在校生約九百名を前に講演を行った。

「二十一世紀型スキル」とは、加速する二十一世紀のグローバル社会をたくましく生き

抜くスキル（資質能力）である。具体的には地球規模の意識を常に持ち、異文化への適応能力、言語適応能力、ICT（情報通信技術）の活用能力、経済・金融・科学分野への深い理解力を持ち、国際的なチームワーク力を持って次から次へ起こる問題を解決する能力を身に付けることである。しかし「二十世紀型スキル」である「基礎学力」が不要となった訳ではない。従来よりも、さらに密度が濃い学力や能力が求められている。先人の知恵に学ぶと同時に「二十一世紀型スキルの開拓」を考えてみようと言語かけた。

二十一世紀は答えのない、先の見えない時代

二十一世紀は予想外の出来事が次から次へと起こる時代であり、さらに知識も技術も環境も倍速で変化する時代である。さらにすごいのは情報爆発である。現在の情報量は一・八ZB（ゼッタバイト）と言われており、二〇二〇年にこの情報量は二十倍の三五ZBになると予想されている。（一・八ZBは世界中の砂浜の砂の数。だれが数えたか不明だが）電子情報通信学会誌による）どこにどのような情報があるか、これを計測するのは難しいが、一つの目安としてネット社会を支えているウェブサーバーの数がよく用いられる。二〇〇七年における世界のサーバー数は三千二百万台で、米国にはその約半分の千五百三十二万台ある。日本は二百四十六万台で、世界の七・七％のサーバー数である。言語別に見ると英語環境でのアメリカのサーバー（世界の半分の情報量を有している）、日本語環境での日本のサーバー、極端に言えば、世界の情報の七・七％しか日本に情報がなく、し

かも科学技術情報に疎いのは日本語サイトである。したがってこれから科学技術や先端情報に興味を持つ諸君は、直接、英文情報にコンタクトできなければ本当の情報を得ることができない。

二十世紀と二十一世紀型スキルの違いとは

二十世紀型のスキルは、まず個人のスキルが最優先であり、基礎学力と前任者の型の継承、活動範囲は国内が主体。英語能力は、あれば望ましい環境であった。ある意味では過去問題を頭に入れ、すぐ答えを出せる人間が優秀とされていた。では二十一世紀型スキルとは、個人の能力プラスチームワーク力であり、基礎学力はもちろん応用学力と現場適応力が求められる。言語環境、英語はもちろん、そのほかの多言語が必要である。

もっとも重要な資質は、毎日膨大に生産される情報の収集と選択、それに基づきビックデータを解析する能力である。つまり問題の発見力とその解決力が求められている。

この変化に対応できない人は、生き残れない状態になる。ダーウインの進化論では「体が大きく、力のある種がいきのびたのではない、環境の変化に対応できた種のみいきのびるのだ」と述べている。

世界で戦える人材とは

グローバルな対話能力である。人種、文化、宗教を問わない対話能力。次にプレゼンの

能力である。日本は特にプレゼン能力が欠けている。筆者が国際会議等で海外メディアの人間と話をする時、「日本人の写真を取るのが一番難しい、なぜならほとんどのプレゼンターが手元原稿の棒読みであり、下を向いているので、シャッターチャンスが難しい。でも最近は日本製の素晴らしい連射カメラに助けられている。日本は素晴らしい」と笑えないジョークである。筆者がニューヨーク州立立大学でプレゼンの講義を受けた時、教授から話された言葉を鮮明に覚えている。「原稿を見てプレゼンすることは、皆の前で自分の能力のなさをプレゼンしているに等しい」と。最後はグループを率いるリーダーシップである。これだけ複雑な社会や産業構造では、個人の能力は限られる。個々の能力のある集団をまとめてゆく統率力が求められる。今年の三月末に筆者が講義した米国ボストンのバブソン大学でのグループ討議が思い出される。十七年間全米のMBAコースでトップであるバブソン大学では、徹底的にグループ討議で意見を戦わせている。日本人の卒業生には、稲森和夫京セラ会長、トヨタの豊田章男社長、イオンの岡田元也社長などを輩出している。どんな社会や会社組織でも、個人的には意見が合わないが、その分野に精通しているプロの人材がいる。彼らを束ねて目的に向かわせる統率力が必要である。

組織「二・六・二」の法則

よく知られている法則であるが、上位の二割は、仕事や学習に意欲を燃やし、変革を求めて行動し成果を上げる上位集団である。会社でいうとこの二割の人間が稼ぎ頭である。

中間の六割の人間は、上位集団と、下位集団の間で揺れ動く集団であり、リーダーや動機づけにより行動を決めるタイプが多い集団であり、決まった仕事が好きで、変化を好まない人間が多い。最後の二割の集団はすべてに問題意識がなく、常にボーとしており、たまに仕事をさせると大きな損失を発生させ、組織の足を引っ張る下位集団である。面白いのは、もしあなたが社長や組織の長の場合、この下位集団の二割を首にすると、その上位の六割集団の中から、また下位の二割が生まれてくることである。

偉大なる企業のリーダーとは

偉大なる企業のリーダーはカリスマ型経営者でなければならぬ。しかし、カリスマ型経営者が去ったあとを見ると、一代限りで終わる会社は、経営者は「俺の会社だ」と言い続けていた会社であり、逆に「私の成功は、素晴らしい仲間や社員に恵まれたことだ。」と言いつづけていた経営者の会社は「代を重ねる毎に強くなる会社」であった。

以上が九十分にもわたり高校生九百人の前に話した内容である。実は、この内容は筆者が大学生に講義している内容である。今回聴講していた高校生の中で二割くらいが、奮起しグローバルな視点を持ち、将来元気な日本に改革することを期待したい。